

硝子の猫

作・こきべあきひろ

【登場人物】

1

織田 祐介 …… 高校3年生。弓道部。
藤山 朝実 …… 高校3年生。

橋本 ふみか …… 朝実の友達。弓道部。
五十嵐 達也 …… 祐介の友達。弓道部。

織田 聰 …… 祐介の兄。ボクサー。

地方都市のコーヒーショップのチエーン店。

高校の夏の制服姿の祐介と朝実が現れる。

朝実は髪を後ろでしばっている。

二人ともカバンを持ち、祐介はコーヒーカップを2つ持っている。

祐介 (空いている席を見つけて) あ、じゃああの、そこで、
朝実 あ、はい。

祐介と朝実は座りはじめ、祐介はカップをテーブルに置く。
1つは朝実が座ろうとしている席の方へ。

朝実 あ、ありがとうございます。
祐介 ああいえ。

座つたあと、少し沈黙があつて。

祐介 あ、どうぞ。飲んでください。
朝実 あ、はい。

朝実は返事したものの飲まない。少し沈黙。

祐介は朝実が飲まないのを見て、自分が先に飲むことにする。
祐介が飲んだのを見て、遠慮がちに朝実も飲み始める。

また少し沈黙。

祐介 これ、ちょっとと思つてたのと違いました。

朝実 え？

祐介 ラテつてあの、クリームみたいなやつに、チョコみたいなやつかかるつてるやつかなつて、

朝実 モ力、ですか？

祐介 あ、モ力……、ああ、ラテじやなくて、

朝実 写真載つてましたよ、

祐介 あ、なんかよくわかつてなくて、え、ラテつて？

朝実 ラテは、ミルク入つてるだけです、

祐介 あ、じやあコーヒー牛乳か、コーヒー牛乳つていうとなんか、変ですかね、

祐介 少し沈黙。
祐介 もう一口飲んで。

祐介 普通のコーヒー頼んだんですね、普通つてええと、ドリップ？ ですか？ 女子つて甘いもんが好きなのかなつて、

朝実 あ、好きなんですけど、ちょっと、

祐介 あ、ダイエット中とか、あ、すみません、

朝実 ……。

祐介 あの、名前……、

朝実 あ、

祐介 あ、ええと、織田です。織田、祐介。

朝実 あ、織田くんでも、祐介くんでも、あ、祐介でも、あの、だ

いたいクラスのやつからは祐介つて呼ばれてるんで、

朝実 あ、はい、……えつと、藤山です。

祐介 フジヤマさん、

朝実 ああ、

祐介 フジヤマつてあの、富士山じやなくて、

朝実 佐藤の「藤」に、山で、フジヤマ、

祐介 あ、あああ、はい、最初からそつてました。

祐介 少し沈黙。

祐介 下の名前は、

朝実 あ、朝実です。

祐介 藤山アサミさん。

朝実 はい。

祐介 じやあ、あの、……藤山さんつて呼びます、

朝実 はい。

祐介 少し沈黙。

朝実、カップを手に取ろうとするが、やめて、

朝実 あの、やつぱりお金（財布を取り出そとしながら）、

祐介 ああいや、こつちから誘つたんで、ほんと、遠慮しないで、

飲んで大丈夫ですから、

祐介 少し沈黙。

朝実 びっくりしました？ さつき。

祐介 ああ、びっくりつていうか、まあ、ちょっと、びっくりしました。だつてそりや、うちの高校の制服着てる人が、飛び降りようとしてるから。

朝実 ま、あの、飛び降りる気はなかつたんですけど。

祐介 でも、橋の柵乗り越えてたから、

朝実 あ、最近よくやつてるんです、

祐介 ……なんで？

朝実 ……（首を軽くかしげて）なんとなく？

少し沈黙。

朝実 あ、おかしいですよね、すみません。

朝実、コーヒーを飲む。

祐介 いや、ありだと思います、全然。

朝実 あ、でも、落ちたら死ぬかなとか、考えますけど。

少し沈黙。

祐介 ……藤山さん、何年生ですか？ あ、僕、3年なんんですけど。

朝実 あ、私もです。あの、たまに、廊下ですれ違つてたと思います。

祐介 あれ、あ、そう言われてみれば、あ、すみません、僕、あんま人の顔覚えられなくて。……あ、なんか、あれつすよね、夏休み。

みも終わつて。受験勉強とか、僕もやりたくないんですけど、でもやんなきやいけないし、死にてー、みたいな。

朝実 （伏し目がちに少し困ったような笑顔）

祐介 ……あ、何組ですか、僕、3組です。

朝実 5組です。

祐介 あ、橋本ふみかつてやついるでしょ。あのちつちやいやつ。部活同じんですよ。弓道部で。あ、もう引退したんですけど。バカでしょあいつ。この前、なんかパニックになつてて、どうした？ つてきいたら、「メガネないメガネない」つて、あいつ、メガネかけながら言つてるんですよ。バカなんですよ。

朝実 あ、親友です、ふみか。

祐介 あ、なんかすみません。

朝実 いや、でもあいつバカなんで、（少し笑う）

祐介 （一緒に笑つて）あ、ですよね、あいつね、

朝実 （少し笑いながら）この前、足痛い足痛い、足大きくなつたかもしぬないつていうから、見てみたら、靴、逆に履いてるんですよ。

祐介 そう、そういうやつなんですよあいつ。

二人、一緒に笑つている。

祐介 そういう顔の方がいいつすよ、

朝実 笑つてしまつている自分に気づき、また伏し目がちに少し困つたような笑顔。その後、腕時計を見て、

朝実 あ、すみません、もう。

祐介 ああ。はい。

朝実 ……今日は、ありがとうございました。なんか、あんまりい

いことなかつたんですけど、今日は、ちょっとといい日でした。

祐介 僕も、あんまりいいことなかつたけど、今日はちょっととい

日でした。

朝実 ……やつぱりお金、

祐介 いやあの、あ、じゃあ今度なんかおごってください、それで、

ね。

朝実 わかりました。

祐介 だから、また、会いましょうよ。

朝実 ……はい、ぜひ。

祐介 あ、家どつちですか、

朝実 えつと、こつちの、北？ 北ですか？ あつち。

祐介 川の、どつち側ですか、こつちか、あつちか、

朝実 あ、あつちです、

祐介 あ、じゃあ、僕もあつちなんで、途中まで、

朝実 あ、そうですね、はい。

2

祐介の部屋。

祐介と、同じ弓道部だった達也、ふみかがいる。

達也 世の中はさ、男女平等男女平等って言うじゃない。でも俺現

実はそうじやないなって思うわけ。デートでさ、男がおごるかおごらないか問題があるじやない。

ふみか あたしおごってほしい。

達也 黙つて。

ふみか (寝転がって) わーい。

達也 でも俺、あの問い合わせそもそもおかしいと思うわけ。なんで男がおごるか、割り勘かの二択なわけ？ 当然女がおごるつていう選択肢もありうるわけじやん。平等ならばね。でもそういう質問するときつて、なぜかその選択肢ないじやん。デートでご飯食べるときはおごってほしいですか。割り勘でいいですか？ あたし絶対おごってほしいし、あたしは全然割り勘でいいー。しかもその割り勘でいいって言うやつ、なんか若干偉そうじやん。いやいやいや、平等だつたらむしろそれが当たり前だろ。

祐介 どんだけ目の敵にしてんだよ。

達也 じゃあ例えさ、俺とふみかがデート行くとするじやん。

ふみか 行かない。

達也 うるさい。

ふみか うるさいでーす。

達也 じゃあ例えさハンバーガー食いに行きます。

ふみか えー？ もつといいとこ連れてけよ。

達也 お前ハンバーガー大好きだろ。

ふみか ハンバーガー大好きー。

達也 で、なんかセット頼んでき、一人600円かかりました。で、

そのときに俺がさ、ねえ、割り勘にする？ それともおごつてくれる？ つてきいたらどう思う？

ふみか 百回死ねつて思う。

達也 うん、それは言い過ぎだけどさ。でもやっぱそう思うわけじやん。

ふみか 思うねー。

やん。

達也 じゃあ、ねえ割り勘にする？ それともおごろつか？ つてきいたらどう思う？

ふみか 質問する前におごれよって思う。

達也 ほらこれだよ。女はさ、心のどつかで自分はおごられて当然だと思つてるわけ。

ふみか えだつてデートでしょ。デートだつたらそうでしょ。これが例えは放課後にどつかで食べようぜーみたいな話だつたらこれはもう当然割り勘だよ。でも違うじやん。デートじやん。

達也 なんだよそのデート理論。

ふみか デートつてなつたら、おしゃれするじやん。髪とかちょっと整えるじやん。着ていく服で2時間くらい迷うじやん。自分のベストな状態で会いにいくわけじやん。でもそつちはさ、朝起きて寝ぐせボサボサで、一番取りやすいところにある服テキトーに着てくるじやん。だからその女の苦労と男がおごつてくれるつていうので釣り合いとれるじやん。

達也 はーじやあ言つときますけど、女はカワイイ状態で来たらそれでオッケーかもりませんけど、こつちは色々楽しませるプランとか考えますから。よし、デート楽しませてもらおうつ。みたいな態度じやん女は。男は、あの手この手で女を楽しませるために必死になつて、プランとか練つてきますから。今相手が楽しんでるかどうかとかかなり気にして微妙に軌道修正しようとしたりしてますからあ。

ふみか そんなのそつちが勝手にやつてるだけじやん。デートと

かこつちで勝手に楽しみますから。

達也 はーじやあ、服で2時間悩むのとかもそつちが勝手にやつてるだけじやん。全然取りやすいところにある服着てくれればいいじやん。

ふみか ジやあ全身ジャージでーす。

達也 ジやあ俺も全身ジャージでーす。

ふみか ジやあもうドタキヤンしまーす。

達也 家行きまーす。

ふみか くんなや。

達也 ピンポンピンポン、橋本さん、いるんでしょう。橋本さーん。

ふみか 居留守でーす。

達也 ガチャ。失礼しまーす。おうちデートでーす。

ふみか あがつてくんなよ。

達也 D V Dみまーす。

ふみか テレビのコンセント抜きまーす。

達也 コンセント刺しまーす。

ふみか ブレーカー落としまーす。

達也 ジやあ充電してあるパソコンで見まーす。『スター・ウォーズ』見まーす。

ふみか はーエピソードなんばですかー。

達也 エピソード3でーす。

ふみか はい天才。大画面がいい。テレビでみよー。

達也 残念ブレーカー落としました。

ふみか ジやあまたブレーカーあげまーす。

達也 ジやあテレビで見まーす。

ふみか うわーおもしれー。何回見てもおもしれー。

達也 エピソード5もいいんだけどねー。

ふみか ……うん、（このデート）悪くないね。

達也 だろ？

祐介 ……え、なにこの茶番。

ふみか 『スター・ウォーズ』出してくるのはずるいよね。

達也 やっぱりいかなあ。

祐介 え、あのさ、二人はそもそもデートつてものをしたことがある

の？

ふみか・達也 一回もなーい。

祐介 なんなんだよこの話。

達也 モテないやつはさ、こうやつていろいろ妄想してさ、生きていくんだよ。

ふみか 服で悩んだこととかないなー。一番とりやすいところに

ある服着るもんなー。

達也 だからモテないんだよ。

ふみか ま、いつか。

二人笑う。

ふみか ……何しに来たんだつけ。

祐介 受験勉強。

ふみか 嘘だ。

祐介 ふみかが言つたんじやん。一人じや勉強できないから三人

でしようつて。

ふみか それがこのザマだ。

達也 テスト前に部屋の掃除しちやうつてよく言うじやん。

ふみか わかる。

達也 僕、この前気づいたら3時間くらいカッターで鉛筆削つてた。3時間も削つてると、新品の鉛筆が跡形もなくなることがわかつた。

ふみか ノーベル賞。

達也 なんの賞？

ふみか ノーベル……鉛筆跡形もなくなつたで賞。

二人、こらえながら爆笑。

達也 くだらなさ過ぎる……もっと面白いこと言えよ……。

ふみか 頭悪いからこれが限界……。

ふみか、笑いながら祐介に頭突き。

祐介 いてーよ。

二人、少しして笑い終わつて。

ふみか ……不毛だ。

達也 あー。ポテチ食いながらコーラ飲みてー。

ふみか それだな。

祐介 あ、あつたと思つたけど、持つてくる？

達也 神かよ。

ふみか テイクミー・ポテチ・アンドコーラ。

達也 お、英語満点。

二人、しようもなきすぎて爆笑。

ふみか 今日、なんか忘れてる気がすんだよなあ。

達也 なに？

ふみか わかんない。いつか。

達也 あつそ。

ふみか (勉強の準備をしている)

達也 ふみかってさあ。

ふみか (準備しながら) なに？

達也 ちよつと、いつきこうかなつて思つてたんだけど。

ふみか うん。

達也 ふみかって、祐介のこと好き？

ふみか お……あー、……んん……。

達也 見てりやわかるよ。

ふみか 嘘でしょ。

達也 お前何かと祐介の家來たがるじやん。

ふみか ほんと？

達也 今日だつてそうじやん。

ふみか あー……それはでも違うよ。居心地いいから。

達也 祐介といるのが？

ふみか ……うんだから、好きつて、そういうあれじやないよ。

達也 (ノートや問題集を出し始める)

ふみか いやほんと。

達也 この前さ、祐介が女子と二人で歩いてんの見たよ。

ふみか ……え、弓道部の？

達也 いや、俺は知らない人だつたけど、でも制服はうちの高校つ
ぽかつたよ。

ふみか、カバンからノートや問題集を出す。
達也は出さない。

祐介 お前らせめてノート開いとけよ。

達也 あ、祐介さあ。

祐介 ん？

達也 いや、あとで話すわ。

祐介 あそ……あ、ふみかさ、メガネやめた？

ふみか は？ 今更じやない？ 朝からメガネやめてたし。コン

タクトデビューしたし。

達也 そういうえばメガネかけてないじやん。失くしたの？

ふみか 失くしてねーし。家にあるし。

祐介 メガネはずしたら実は美人みたいなのあるけど、そうでも

ないね。

ふみか すべての「そうでもないメガネ女子」に謝れ。

祐介 ごめんな西郷隆盛。

達也 日本史満点。

祐介は去つていく。

ふみか ……勉強するか。

達也 うん。

ふみか いやほんと。

達也 この前さ、祐介が女子と二人で歩いてんの見たよ。

ふみか ……え、弓道部の？

達也 いや、俺は知らない人だつたけど、でも制服はうちの高校つ

ふみか えー……。あ、ヤバイ、勉強する気なくなつた。

達也 やつぱ好きなんじやん。

ふみか いやでもそういうのつていうかあ……。

達也 彼女だつたらどうする？

ふみか ……いやでもあたしは、祐介と一番仲いい女子だつてい

う自負があるから。

達也 そんなん仲いいとか関係ないじやん彼女は。

ふみか え。

達也 なにその目。

ふみか 一番仲のいい人と付き合うもんじやないの。この世界の

ルールつてそういうじやないの。

達也 それはどうとも限らないじやん。

ふみか 嘘だ。人類つて仲良くない人と付き合うもんなの？

達也 それはだつて違う要素があるじやん。

ふみか えーなに。

達也 かわいさとか。エロさとか。

ふみか (床に大の字で寝て) ……殺せ。あたしを殺してくれ。

達也 そのコちよつとかわいかつたからなあ。

ふみか はーどつこいしょーどつこいしょー。

達也 ……なにそれどういう気持ち？

ふみか どうでもよくなつた気持ち。どつこいしょーどつこいし

ょー。ソーランソーラン。

達也 あ、ソーラン節だつたんだそれ。

祐介が戻つてくる。コーラだけ持つてゐる。

祐介 (寝てゐるふみかを見て) え、超やる気ねえじやん。

ふみか やーーーれんソーランソーランソーランはいはい。

祐介 コーラかけるよ。

ふみか 本望だ。

祐介 (無視する) ポテチなかつたわ。

達也 マジで、じやあピザは？

祐介 ねえよ。

達也 じやあコーラだけで我慢するかあ。

達也がコーラをコップに注ぎ飲む途中で、ふみかは祐介を何回か殴る。

祐介 いつて。は？ 痛いんだけど。

達也 (飲み終わつて) 祐介さ、この前一緒に歩いてた女子、誰？

祐介 え？ 誰？

達也 え、俺がきいてんだけど。

祐介 えいつ？

達也 えーと待つてね……おとといの、6時くらい？ 橋のあた

り。

祐介 おとといの6時？……なんでそんな時間にお前いるんだよ。

達也 突然川が見たくなるときあるじやん。

祐介 ない。

ふみか ない。

達也 俺はなんの。

祐介 あつ、ああああ。

達也 誰だよ。

祐介 あれはでも、なんか、別になにってことじやないよ。
達也 なにってことじやないってなんだよ、誰だよ。
祐介 いや、なんか偶然、あれだつただけで、
ふみか (突然起き上がつて) あつ。
達也 なに?
ふみか 誕生日じやん。
祐介 おめでとー。(拍手)
ふみか あたしのじやなくて。あーしまつた。
達也 なになに?
ふみか 今日お母さんの誕生日でケーキ予約してたんだ、あーや
ばい、帰る、お母さん祝う。お母さん泣いちやう。(勉強道具を片
付け始める)
祐介 おめでとうって伝えといて。
達也 あ、じやあ俺も。
ふみか 誰だよお前ら。
達也 またあしたー。
ふみか (帰ろうとして) あれ? あれ? え? あれ? あたしメ
ガネどこに置いた?
祐介 コンタクトだろ。
ふみか あ、死にた。実家に帰ります。
達也 もとから実家だろ。
ふみか さよならー。(なぜか転ぶ) あーもうやだ、ばいばい!
達也 ばいばい。
祐介 ばいばい。
ふみか ふみかは去つていく。

祐介 なんか今日、いつも増してバカっぽかつたな。
達也 いつもあれくらいだろ。
祐介 そつか。
祐介 え、で、誰なの?
祐介 いや別にほんとになんにもないよ。
祐介 なんでそんなに言い渋る? ってことはやっぱなんか、
祐介 いやいやほんとに、なんか、たまたま会つて、で、なんか、
祐介 ちょっと喋つたりして、帰る方向一緒だつたから、途中まで歩い
て、みたいな感じ。
祐介 えそのたまたま会うつてなに? え知り合いだつたの?
祐介 いや全然知り合いじやなかつたけど。
祐介 知り合いじやない人とたまたま会うつていう意味がわから
ないんだけど。
祐介 いやうーん、なんて説明したらいいかなあ。
祐介 え、じやあ名前教えてよ名前。うちの高校でしょ。
祐介 ええと……藤山さん、だね。
祐介 フジヤマつて、(山のジエスチャーをして) FUJIYAMA?
祐介 じやなくて、佐藤の「藤」に山で藤山。
祐介 へー、藤山なに?
祐介 藤山朝実さん。
祐介 アサミちゃんか、良い名前だね。
祐介 アサミちゃんとか言うなよ。
祐介 ちょっとかわいかつたしよ。
祐介 ああまあ、そうかな。
祐介 やるなー。

祐介 でも俺、なんかきいたことある名前のような気がしてて。

達也 あれじやない？ 3年？

祐介 うん。

祐介 なんか、テストの順位とか出るじやん、それじやない？

祐介 いや、全然学校じやない、どつかで。

祐介 まあ生活には大した支障はないからね。（祐介に）ちょっとと捜していい？

ドアをノックする音。

祐介 はーい。

聴の声 入つていい？

祐介 あ、どうぞ。

祐介の兄・聴が入つてくる。

少し片足を引きずつているように見える。

軽く右腕を握つたり開いたりしている。

聴 （達也に）あ、どうもどうも、今日も来てたんだね。

達也 お邪魔してます。

聴 あのさ、こっちにあれきてない？「ウハウハハーレム大作戦」。

祐介 ないしタイトルしようもな。

聴 そういうしようもないタイトルのが好きなんだよねー。

祐介 そつちの部屋にないの？

聴 ないから来たんだよ。まずいなー、母さんにだけは見つかりたくないからなあ。

達也 （聴が足を引きずつているのが気になつていて）あの、……足、どうかしたんですか。

聴 ん、あーそうなんだよちよつとね、達也 ケガですか？

聴 ケガっていうか、後遺症？ ちよつといろいろあつてね、右半身がちよつとしびれてるんだよね。

達也 え、大丈夫ですか。

聴 まあ生活には大した支障はないからね。（祐介に）ちょっとと捜していい？

祐介 「大作戦」？

聴 うん。

祐介 ま、いいけど、ないよだぶん。

聴 まあ一応、なんかに紛れてるかもしれないからさ。

聴、捜し始める。

祐介 ああ、

達也 （祐介に）お兄さんボクシングしてるんじゃないつけ。

祐介 そうなんだよ。俺これでも一応プロボクサーでさ、プロつてい

つてもあれだよ、別にボクシングで食えてるとかじやなくて、プロ試験つてのがあって、それに受かれば一応誰でもプロボクサー名乗れるんだけどさ。まあでもけつこう期待の若手とか言わ

れてて、それなりに注目とか、一応されてたんだけど。まあ、ちよつとこれじやあねえ……試しに、ちよつとやつてみたりしたんだけど、もう前みたいには全然、とつさに動けなくなつちやつて、

達也 ……。

聴 けつこう、ボクシング一筋みたいなとこあつてさあ、だから、

なんか最近困っちゃってさあ。トレーニングして、どんどん強くなつて、もちろん途中で挫折なんかもあつたりしてさ、でも俺、そういうの打たれ強いし、けつこう根性あるから、そういうのも乗り越えてさ、将来的には日本チャンピオンになつてさ、世界に行つてさ、もちろんそこで戦うやつらはめちゃくちや強いんだけど、でも俺は勝つんだよ。世界チャンピオンになつてさ。最強の挑戦者つていわれるやつがきても、防衛してさ。やつぱ俺最強だしさ。なんてさ、なんかそんなこと考えてたからさ、急にそれがなしになつちやつて、なんかなにしていいかわからなくなつちやつてさ。ボクサーになるつて思つてたからさ、勉強も口クにしてこなかつたし、人ともそんなにうまく喋れないしさ。なんか、困つちやうよねー、はは、

そういうながらも、聰は捜している。

聰 去つていく。

祐介、寝転がり、天井を見ながら息を吐く。

祐介 藤山さんの話、他の人には言わないでおいてもらつてい
い？

祐介 ……うんまあうん。

祐介 ふみか、親友みたいなんだよ。
祐介 えマジ？ え、じやあふみかのこと知つてんだ。
祐介 うん。ちよつと、いろいろあるから。

祐介 うん、ふみかには黙つとくわ。

祐介、コーラをそそいで飲む。

祐介 ……勉強するか。

祐介 うん。

勉強の準備をし始める二人。

聰 ……ダメだ、やつぱねえわ。やつぱ俺の部屋かなあ、早く見つけないと延滞かかつちやうしなあ。（達也に）あ、どうもお騒がせしました。ごゆつくりー。

祐介 あ。
祐介 なに？
祐介 兄貴さ、
聰 ん？
祐介 兄貴が助けたつて言つてた人、なんていつたつけ？
聰 ん？ ああ。フジヤマさん？
祐介 ……。
聰 （祐介を見て）なんかあつた？
祐介 あ、ううん、なんだつたかなと思つて。
聰 （捜す作業に戻つて）ちよつとかわいい感じの女人だつたよ。
祐介 そなんだ。

ファーストフード店のカウンター席。

制服姿の朝実とふみかが座っている。

朝実の前には飲み物のカップ、ふみかの前には山盛りのポテト。

ふみかはポテトを食べている。

ふみか ほんと、誰なんだよポテト開発したやつ。うめえわ。ノーベル賞もんだわ。崇めたいわほんと。うめえー、無限に食えるなこれ。信じられないわ。だあー、受験勉強飽きた。ポテトに囲まれて過ごしたい。そうか、ポテト農家か。ポテト農家になれば受験勉強しなくて済むのか。よーし、受験勉強やめてポテト農家になろーっと。うめえ、ポテトうめえなー。

朝実 情緒不安定か。

ふみか だつてさー、こんな青春真っ盛りな時期に勉強とか意味わかんないじやん。うめえな。

朝実 大学行かなきやいいじやん。

ふみか ポテト農家?

朝実 ポテト農家かはわかんないけど。

ふみか だつてお母さんが行けつて言うんだもん。でも大学生とかウエイウエイ言つてバカじやん。

朝実 偏見。

ふみか つつーか行きたい大学もないしなあ。でも働くのもなんか嫌だし。お嫁さんになりたいなあ。ポテト農家のお嫁さんかなあ。

朝実 農家も大変だつてきくよ。

ふみか この世に大変じやないものなんてないじやん。愛があるかどうかじやん。あたしはポテト愛してるから、めっちゃ種まくあ。

朝実 太るよ。

ふみか ポテト食べて太るんだつたらオツケー。

朝実 じやあもうポテト農家でオツケーだわ。

ふみか (窓の外に猫が見えて) あ、猫だ、ネコー。(手を振る)

朝実 黒猫つて不吉つて言わない?

ふみか あー猫になりたい。「私は猫になりたい」って映画ありそうだよね。

朝実 ない。

ふみか 猫つて自由じやん? 勉強しなくていいし。私は猫になりたい。

朝実 でも、ぱつと見自由に見えるけどさ、案外社会性が必要だつたりするらしいよ。自分の子供を敵から守つたり、食べ物探しなんかつたら死んじやつたりもするし。私たちが思つてたより、猫つて大変だつて、なんかに書いてたよ。あと、あれ寂しいじやん、死にそなときに、人の前から姿消すとか……、

ふみか あ、じやあダメだ。あたしは愛する夫と家族たちに囲まれて死にたいから。

朝実 ……。

ふみか、朝実をじつと見ている。

朝実 ……なに?

し、めっちゃ水とか肥料とかあげるし、めっちゃ収穫するもん。そして、めっちゃ料理してめっちゃ食べるもん。マッシュルームテトをおかずにつライドポテト食べるもん。ポテトサラダも添えるし、おやつにはポテチ食べるもん。うめえなー。

ふみか あたしなんかした?

朝実 なんで?

ふみか なんか、なんだろう……顔が、変。

朝実 は? 失礼。

ふみか なんかに遠慮してる? つていうか、なんか、ずっとそ

だよ、夏休み明けから。

朝実 ……。

ふみか ようよう。あたしたち親友だろ。知つてると思うけど案外 私ビビリだから、ずっと朝実になんかあつたのかきいていいの かな、つて迷いながらポテトの話してたんだぜ。そんな風に見え なかつたと思うけどな。

朝実 (なにかためらつてている様子)

ふみか なあ、吐いて楽になれよ。お前がやつたんだろ? ほら、

ポテト食うか? (ポテトを差し出す)

朝実 いらない。

ふみか (差し出したポテトを食べる) 言わないとお腹のお肉触るよ。

朝実 ……。

ふみか あーあ、朝実のこと親友だと思つてたのになあー。

朝実 ……あのね、

ふみか よしきた、かもん。

朝実 うちの学年にね、うーんと、ある人がいて、

ふみか お、いいよいよ。

朝実 あ、名前なんて言うんだろうなあつて、でも、急に、名前な んですかってきくのも変だしつて……で、この前、その人に声か

けられて、それで……二人で、話した。

ふみか (朝実のお腹をつまむ)

朝実 腹の肉つまむなや。

ふみか なにそれいい話じやん。100いいねつけちやう。で付き 合つたの?

朝実 いや早いから。

ふみか えーどんな人どんな人、イケメン? 私3年生のイケメ

ンだいたい把握してるよ。

朝実 あー、つていうか、ふみかと同じ部活だつた。弓道部。

ふみか ……マジ?

朝実 なんだじやあ言つてくれれば全然紹介でき たのに。

朝実 いや、でもその人弓道部だつて知らなかつたし。

ふみか えー誰かなあ、同じ学年の弓道部男子つて言つたらあい つかあいつかあいつかあいつかあいつかあいつかあいつつてこ とかあ。

朝実 具体的に思い浮かべんのやめてよ。

ふみか だれだれ? テルミー テルミー。

朝実 んーと、オダ、くん、つて人。

ふみか ……。

朝実 (急に元気なくなつたふみか) え、なに?

ふみか ……。(機械の電源が切れたかのように一切動かない)

朝実 え、生きてる? ふみか?

ふみか ……(生き返つて独り言のように) あ、そつか、朝実だつたん だ、

朝実 え、なに?

ふみか ううん。でも……ま、あいつそんない奴じやないよ。

朝実 え、そう?

ふみか だつてすごいあたしのことバカにしてくるし。

朝実 それはふみかがバカだからじやん。

ふみか バカにバカつて言うの失礼じやん。

朝実 バカなのは認めるんだ。

ふみか 世界史、マークシートで0点とったからなあ。

朝実 逆に天才だよね。

ふみか あーあ、全部同じ番号塗りつぶしひけば20点くらいは付

されたのになー。

ふみか、ポテトを食べる。

ふみか ……どうすんの？

朝実 なに？

ふみか 付き合いたいの？

朝実 ……。

ふみか あいつ彼女いるよ。

朝実 ……。

ふみか 嘘。いないよ。

朝実 やめてよ。

ふみか (ポテトを食べる)

朝実 でも、今、彼女いるって言われて、一瞬安心した。

ふみか (ポテトを食べている)

朝実 どうしていいかわかんないよ。

ふみか 女子高生かお前。

朝実 女子高生だよ。

ふみか そんなんとつとと白黒つければいいじやん。好きです、付き合つてください。ごめんなさい。おわり。

朝実 なんで失敗してんの。

ふみか ま、次があるよ。

朝実 ……。

ふみか あれ、落ち込んだ？ めんごめんご。

朝実 ダメなんだ、私、

ふみか 頭が？

朝実 誰かにこういう気持ちをもつって、ダメだよ、

ふみか ジエーポップか。

朝実 夏休みにね、(と言つたきり黙る)

ふみか ?

朝実 ……私、ひとの人生壊した……。

朝実 なんつって。ごめん、今のはなし。今日の話、全部きかなかつ

たことにして。(飲み物を飲み切つて帰ろうとする)

ふみか ちよい。

朝実 ……。

ふみか (朝実を見ている)

朝実 ごめん。またね。

朝実は去つていく。

ふみか …… (ポテトを食べる) うま。

夕方。もう少しで夜になりそうな公園。

ベンチの上で、祐介が寝転がっている。

スマートフォンを確認し、すぐに戻す。

少しして、もう一度確認し、またすぐに戻す。

寝転がつて、空を見ている。

ふみかが現れる。

ふみか よ。

祐介 え。

ふみか (祐介を見ている)

祐介 ふみふみじやん、どうしたの。

ふみか え、あたしいつからふみふみって呼ばれるようになつた

の。

祐介 今日の朝、歯磨いているときに、あ、ふみふみっていいなつて思つたから。今日から。

ふみか へえ、歯磨きながらあたしのこと考えてたんだ。

祐介 うん、普段は全然ふみかのこととか考えてないんだけど、今日はたまたま。

ふみか ……。

祐介 え、で、どうしたの？

ふみか え、あたしが公園に来ちゃダメなの？

祐介 いやダメなんて言つてないじやん。

ふみか たまたま通りがかつたら祐介が寝てたから。

祐介 お前家こつちじやないじやん。

ふみか ……嘘。

祐介 ……。

ふみか 朝実と待ち合わせしてんでしょ。

祐介 ……えなんで？

ふみか いやいいよ隠さなくて。知つてるから。

祐介 あそ。

ふみか 暑いね。9月なのに。

祐介 うん。

ふみか、祐介にジュースを投げて渡す。

祐介 飲んでいいよ。

祐介 ありがと。

ふみか 120円。

祐介 金どんの？

祐介、財布から120円出す。

ふみかは受け取るために祐介に近づいて、そのまま祐介の隣に座る。

ふみか 少女漫画が原作の映画とかやつてんじやん。

祐介 ああ。

ふみか ああいうの観る？

祐介 観ないね。

ふみか 主演の女優がカワイイじやん？ だいたい。

祐介 まあ、観ねえからあんまわかんないけど。

ふみか 予告編とか流れてんじやん。

祐介 ああまあ。

ふみか で、だいたい相手の男がイケメンなのね。だいたい演技下手なんだけど。

祐介 うん。

ふみか で、そのイケメンが歯の浮くようなセリフとか言っちゃつてさ、女子がキヤーつてなるのね。

祐介 へー。

ふみか この話あんま興味ないね？

祐介 うん、そんなに。

ふみか なんであんなカワイイやつとイケメンばっかり出てくるんだよ。説得力ないじやん。つて思わない？

祐介 だつてそんなのバスなやつが出てたつて観に行かないじやん。俺はどつち道行かないけど。

ふみか ほらそれ。結局人類つてバスに興味ないんだよ。それつてひどくない？ カワイイ女つてカワイイだけで得すんじやん。

カワイイだけで色々してもらえたりするじやん。あたしそれ、納得いかない。

祐介 でも、それは俺、筋の通つてる話だと思うけど。

ふみか なんで？

祐介 えだつてカワイイつてことはさ、そこに存在するだけで周りの人の気分をよくするじやん。だから周りの人もなにかお返ししたいなつて思うじやん。

ふみか 理不尽、

祐介 でもそれつてカワイイに限つた話じやなくてさ、別にかわいくなくても一緒にいて楽しい人とか、癒される人とかいるじやん。そしたらその楽しいとか癒されたとかのお返しをしたく

なるじやん。そういうことじやない？

ふみか ……怒つてる？

祐介 え？ いや、全然。

ふみか あんまりあたしにいてほしくないって思つてるでしょ。

祐介 いやそういうんじやないよ。

ふみか 言つとくけど、あたし朝実に頼まれてきてるからね。二人

祐介 きりだと緊張するからつて。

ふみか ちょっと遅れるみたいだよ。道端でおばあさん助けたらそのおばあちゃんが実は宇宙人でUFOに連れていかれそうになつてたんだつて。

祐介 それすぐにNASAに報告しに行つた方がいいよ。

少し沈黙。

祐介、ジュースを飲む。

ふみか それ、おいしい？

祐介 まあまあ。

ふみか ちょっとちようだい。

祐介 うん。

ふみか (飲む) ……うん、まあまあ。(返す)

祐介 (飲む)

ふみか うん、なんかごめんね、わけわからぬ話して。

祐介 UFO？

ふみか UFOじやなくて、なんか、かわいいのつてずるいなつて

思つてさ。

祐介 え、でもふみかだつてかわいいじやん。
ふみか ……えいいよそういうの。

祐介 あれ、自分のことかわいくないと思つてる？
ふみか ……え祐介はあたしのことかわいいつて思つてるの。

祐介 うん。

ふみか ……はー今までそんなこと言つたことないじやん。
祐介 言わないよ。だつてお前そういうキャラじやないじやん。

ふみか はーなにそのキャラ？
祐介 「かわいいつて言つちやいけないキャラ」。

ふみか あたしそんなキャラになつた覚えないし。
祐介 えだつてカワイイオーラ出してないじやん。

ふみか えなに、かわいい人つてカワイイオーラ出してんの？
祐介 出してるよ。

ふみか えなにそれどうやつて出すの。誰にも教えてもらつたこ
とないんですけど。

祐介 いやふみかが出したらうざくなるからやめといた方がいい
よ。

ふみか えなんで？ つていうか今のそれ悪口？
祐介 いやいや褒めてるから。

ふみか (カワイイオーラを出そうとして)あ、こんなところに四葉の
クローバー。うふふ、あたしつて幸せ者だな。でも、はい、あた
しの幸せあげる。

祐介 うざ。

ふみか (地面に寝転がる)あー無理ー。カワイイオーラ無理ー。
祐介 いやかわいいつて言つても、見ようによつてはかわいく

らいだから。

ふみか 上げて落とすのやめて……。
祐介 でも、ふみかと一緒にいると楽しいしね。

ふみか そんなの今まで言つたことないじやん。
祐介 だから言わねえつて。

ふみか なんで？ タノシイオーラ出てないから？
祐介 いや、タノシイオーラは出てるよ。

ふみか イエーイたーのしいー。

少し沈黙。祐介はジュースを飲む。

ふみか ……え、あたしなんにもお返しされてないんですけど。
祐介 えなに？

ふみか さつき、かわいい人とか楽しい人にはなにかお返しした
くなるつて言つてたじやん。

祐介 え、してるじやん。

ふみか してもらつた覚えない。

祐介 え、例えばさ、

少し沈黙。

祐介 ……うん、してないわ。

ふみか 死刑。

祐介 え、じやあふみかは俺と一緒にいて楽しくないの？

ふみか ……ふみふみつて呼ぶんじやないの？

祐介 ああ、リアクション薄かつたからやめた。

ふみか ふみふみにしてよ。

祐介 ああ、うん。

少し沈黙。

ふみか 朝実だつたんだね、一緒に歩いてたの。

祐介 ん?

ふみか 達也が話してたやつ。

祐介 あ、ああそそうそ。

少し沈黙。

祐介 達也からなにかきいた?

ふみか ?

祐介 あ、ううん。

ふみか ……付き合おうとか、思つてる?

祐介 (少し笑いながら) ふみふみと?

ふみか ……。

祐介 藤山さんと?

ふみか ……。

祐介 付き合う、とか……それは、無理でしょ。

ふみか なんで?

祐介 んん……。

ふみか むこうも祐介のこと好きかもしれないじやん。

祐介 (少し笑いながら) それはないつて。

ふみか わかんないじやん。

少し沈黙。

祐介 僕の兄貴さ、プロボクサーなんだよ。……つていうの知つて
るつけ。

ふみか うん。

祐介 それで、ボクサー仲間とキャンプ行くつて言つて、こんな力
バン買ってさ、あと、こんな網とか、あと炭入れるスタンドみ
たいなやつとか買ったみたいでさ、そういうのカバンに詰めて、
笑顔で行つてくるつて言つてさ。あ、俺は夏休みだつたから、ず
つと家にいて。で、うん、その日はなんにもしてなかつたな、そ
の日はつていうか、夏休み中、あんまりなんかしてた記憶ないな。
勉強もしないで、ぼーっと。ま、父さんも母さんも夜になんない
と帰つてこないし、いる日は図書館行つてるとか言つて、テキ
トーに外ぶらついてたりして。で、電話が鳴つたんだよ。あんま
電話つて鳴らないんだけどウチ。で、そんときは母さんいたんだ
な。母さんが電話に出て、なんかの勧誘かなとか思つてたら、な
んかそんな感じでもなくて、そしたら、兄貴が入院してたつて。
で、母さんが慌てて出てつて。俺は相変わらず、家でぼーとし
てて。しばらくして電話がかかつてきて、それは母さんで、兄貴、
川で溺れてる女人を助けて、兄貴、昔水泳やつたからさ、そ
れでなんか水入つちゃつたらしくて、入院するつて。兄貴が家に
帰つてきたときさ、こう、右手を握つたり開いたりしながらさ、
ちょっと笑いながら、俺、もうボクシングできなないかも知れない
わつて、なんか、兄貴が笑顔だからさ、俺も笑顔になきやつて
思つて、あ、そなうなんだ、つてだけ、なんか……そんな兄貴さし

おいてさ、付き合うとか付き合わないとか……ね。

ふみか ……そんなの、でも、祐介がそんな思いしてたつてなつた
ら、そつちの方が兄さん困つちやうじやん。

祐介 ま、別に兄貴もへらへらして、気にしてないような素振りし
てるけど。……その溺れてた女人の人、

ふみか ?

祐介 ……藤山さんなんだよ。藤山朝実さん。

沈黙。

祐介 そりや、その人とそつなるつて、それは……ねえ、

沈黙。

ふみか ……どうすんの?

祐介 ……なにを?

ふみか 全体的に。これから。

祐介 将来?

ふみか だつて、勉強してないんでしょ。

祐介 してないね。

ふみか ……。

祐介 でも就職とかもさ、やりたいことわからんないし。
ふみか とりあえず大学行けばいいじやん。

祐介 うん、まあねえ。

ふみか 一緒に行こうよ。

祐介 んん。

ふみか あたし、バカだけど一生懸命勉強してるし、祐介はちよつ
と勉強すれば入れるよ。

少し沈黙。

ふみか ……ね、キャンプ行かない?

祐介 え?

ふみか みんなで。キャンプ行きたい。あたし毎年お母さんとキャ
ンプ行くんだけど、今年はみんなで行こうよ。

祐介 キャンプはなあ、だつて。

ふみか なに。

祐介 お前溺れても俺助けないよ。

ふみか お前溺れたらあたし助けてやるよ。

祐介 お前泳げんの?

ふみか んー、無理だわ。

朝実が現れる。制服姿。

少し離れたところで立ち止まる。

ふみか ようよう、へい、かもん、かもん、

朝実、近くまで来て、祐介立ち上がる。

(祐介に) あ、こんにちは。

祐介 あ、うん、こんにちは。

朝実 あ、すみません、あの、なんか、着替えた方がいいかな、と

か、でも、織田くん制服だつたら、なんか私だけ気合入れてきたみたいな、あ、なんか、そういうこと考えてたら時間経つて、あ、でもなんか、そんな理由で遅れますって言うの、なんて連絡したらしいんだろとか思つて、あの、あ、ふみかから、ちゃんと遅れるつて、伝わつて……？

祐介 あ、はい、あの、大丈夫です。ふみかの話し相手になつてやつてたんで、全然、暇つぶせました。

ふみか あたし暇つぶしかよ。

朝実 （少し笑つて）ふみかって面白いですよね。

祐介 あ、そつすね、面白いです。

ふみか （ベンチに寝転がつて）おう、エンターテナーふみかと呼べ。

祐介 ……座りたいんだけど。

ふみか つら。（降りる）

祐介 あ、どうぞ。

朝実 あ、はい。

二人、座る。

ふみか （後ろから朝実に抱きついて祐介にてめえよ、デートで公園つてなんなんだよ。夜景の見えるレストランとか連れてけよ。

祐介 いや、デートつていう、あれじやないから。

朝実 あ、あの、私、公園好きなんで、

ふみか そんな奴いねえよ。

朝実 いるよ。あの、シーソーとか、乗れますし、鉄棒は、今日は

ちよつとスカートなんであれですけど、逆上がりとか、超得意です。

祐介 あ、じゃあ今度教えてください。僕、逆上がりできなくて。

朝実 あ、じゃあ、特訓ですね、今度。

ふみか ちょっと不毛な会話してるところ失礼していい？

祐介 お前の存在の方が不毛だよ。

ふみか （雑な感じに）ソレハ勉強ニナルナ。

祐介 リアクションだんだん雑だな。

ふみか 朝実はキャンプに行くことになつたよ。

朝実 え、私？

ふみか そ、来週の土曜。みんなで行くから。あたしのお母さんと一緒に。

朝実 なんで。

ふみか 高校生！ 最後の年！ あたしは！ 青春っぽいことを！

する！ 決まり！ お疲れ！ あとで連絡するね！ ばいばーい！

ふみか、去つていく。

祐介 なんなんだろ、あいつ。

朝実 あ、てか、帰つちやつた、

祐介 あ……なんか、二人、ですね、

朝実 そうですね……、

少し沈黙。

祐介 あ、なんか、すみません、レストラン、とかの方が、

朝実

あ、いや、本当に、公園好きですか、

祐介 あ、ならよかつたです。

沈黙。

少し沈黙。

祐介 あーあの、ごめんなさい、言います。

朝実 ?

祐介 つていうか、今日はこのこと話そうと思つて、呼んだんです

けど。

祐介 あの、

と言つたきり沈黙。

朝実 ?

祐介 あの、織田聰つて、知つてますか。

朝実 え、

朝実、なにかに気づいたように少し身構える。

祐介 織田聰、兄です、僕の、

朝実、どうしていいかわからない顔。

祐介 あの、でも違うんです。兄も、別に恨んでるとかそういうのはなくて、

朝実 (何かを言おうか考えているが言葉は出てこない)

祐介 あの、でも、僕も、それ知ったの、あの、藤山さんに声かけて、一緒に帰つた、その、次の次の日で、だから、なんか、どうしていいかわからなくて、

朝実

あ、じやなくて、そういうところで働く、とか、

朝実 (困ったように笑つて)

祐介 あ、ごめんなさい、

朝実 ……なんか、どうしていいかわからなくて、

少し沈黙。

祐介 藤山さんと会つてから、なんか、藤山さんのこととか、今な

にしてるのかな、とか考えたり、それは悪い意味じゃなくて、なん、いい意味で、でもその、それとは違った意味で、藤山さんも僕の兄貴のこととか考えたりしてるのでなって。……でも、いん

ですよ、考えなくて。兄貴のこと考えるかわりに、もつと、自分の好きなこととか、服のこと?とか、そういうこと、考えてほしいんです。あと、好きな人のこととか。

朝実 ……よかつたです、その話きけて。

祐介 (少し安堵したように笑う)

朝実 私もあの日から、ふとしたときに、織田くんのこととか、考えるようになつて、でもそのたびに、あ、私はそういうこと考えちやダメだなつて思つて、あの人的人生奪つといて、そりやないよつて、なつてたんですけど、よかつたです……これでもう、あきらめがつきます。

祐介 違いますよ。僕が言いたのはそうじやなくて、朝実 わかつてます。でも、そういうことなんです。

祐介 うーんと……そうだ、キャンプ。キャンプ行きましょう、とりあえず。ね? それはもう、ただ、青春しに。それくらいは、ね、いいでしょ。

朝実 ……。

沈黙が続く。

祐介はなにか話さなければと思うが、うまく言葉を思いつけない。

聴が現れる。

聴 おー祐介、あれ、なになにデート?

(朝実に) あ、どうもこ

いつの兄です。え、もしかして彼女ですか、(と言つて、朝実を見たことがあることに気づいてくる) あ、

朝実、頭を下げる。

聴 久しぶり、ですよね?

朝実 はい。

聴 あ、お元気ですか。

朝実 はい、おかげ様で。

聴 あ、じやあよかつた。(祐介に) あれ? もしかして、学校同じ?

祐介 うん、まあ。

聴 あそうなんだ。え、なになに、付き合つてんの?

祐介 いや、そういうんじやないよ。

聴 ちよつときいてくださいよ。こいつねえ、なんか妙にモテたりするんですよ。足速かつたんですよ。小学生のときなんか、バレンタインに、こんな、二十何個とか、チョコもらつちやつて、ま、俺はなにがいいのかわんないんすけど。

朝実 ……。(まだ頭を下げている)

聴 あの、いいですよ、頭上げて。

朝実 いえ、

聴 あの、ほんとに。あれは俺が勝手にやつたことですから。

朝実 ……。

聴 いやあのお願いします。なんか俺、悪い人みたいになつちやうんで。

朝実 (少し上げる)

(ベンチに座つて) え、二人はけつこういい感じなの? そういう

うんじやなくて？俺女の子と一人つきりで公園に来たことなんかなかつたなあ。ま、公園じやなくとも行つたことなんかないけどさ、女子と一人つきりなんて。お前あれ、中学んときさ、よく遊びに来てた女の子いたじやん。なんてつたつけ、あの、かおるちゃん。かおりちゃん？ちよつとかわいらしい子でさ、（朝実に）いたんですよ、そういう子が。あの子絶対お前のこと好きだつたよな。なんなんだろうなあこの差は。お前はきっと、なんかうまいんだよな、全体的に。人との接し方とか。俺、しゃべるの苦手だからさ、女子とかの前だと、けつこう、う、あ、つてなつちやつてさ、まあでもいんだよ、俺にはボクシングがあるしさ、つて。

朝実、頭を下げる。

聰 (それを見て顔がくもる) ……何言つてんだろうね俺は。いや、

ごめん、どうぞ二人で、うん、また。（帰ろうとして）あ、「大作戦」あつた。今、それ返しに行つた帰りで。……今日、冷やし中華だつて。ま、あんまり遅くならないうちに。じや。

聰は去つていく。

祐介 ……頭上げてくださいよ。

朝実 （少し上げる）

少し沈黙。

朝実 ごめんなさい、もう、行きますね、すみません。（行こうとする）
祐介 あの、
朝実 （立ち止まる）
祐介 キャンプ。よかつたら。

朝実、軽く頭を下げる去る。

祐介はベンチに寝転がり空を見上げる。

5

夜のキャンプ地。寝転がつて空を見上げている、祐介と達也、ふみか。

みんな私服。

達也 (指をさして) あれが、ベガだな。

ふみか えどれ？

達也 あのめつちや光つてるやつだよ。

ふみか あ、へー。

達也 あの辺にわつとなつてるのが、水瓶座だよ。

ふみか え？ あれ？

達也 そうそう、水瓶つぽいだろ。

ふみか あー、ああ確かに亀みたいな形してるね。

達也 ……ミズガメつて亀じやなくて瓶だからね。

ふみか え？ ……あー瓶つて感じだね。

達也 で、あれがそれっぽくないけど、白鳥座ね。

ふみか どれ？

達也 あの辺にポツポツポツつてあるだろ。

ふみか え？ あれ？

達也 そう。白鳥座つて白鳥っぽくねえんだよ。

ふみか ヘー。

達也 ま、全部嘘だけどね。

ふみか 時間返せよ。

達也 なんだよ「あー瓶つて感じだね」って、全然瓶っぽくねえじ

やん。

ふみか 言われたらそう見えてくんじやん。

達也 あ、あれは月だよ。

ふみか うん、それはわかる。

達也 ま、あんな星なんかよりもさ、お前の方がきれいだぜ。

ふみか は？ 星のほうがきれいだろ。

達也 そうだな。

祐介 あのさ、俺気づいたことあるんだけどさ。

達也 なに？

祐介 お前らの話つて、なんにもなんねえな。

達也 今更かよ。

ふみか もつと早く気づけよ。

沈黙。

ふみか ねえ、なんにもならない話していい？
祐介 なに。

ふみか あたしと付き合つて言つたら付き合つてくれる？
達也 ……このタイミングじゃなくね。
ふみか は？ このタイミングじゃん。隣で星見てんじやん。

少し沈黙。

祐介 (わざとらしくいびきをかく)

ふみか え、嘘でしょ、起きてたじやん。

祐介 ……うん、起きてるけどさ。

少し沈黙。

祐介 ……ふみかは……違うな。

ふみか 違うつてなに。

祐介 んん……だつて俺たちそういうんじやないじやん。

ふみか これからそうなればいいじやん。

祐介 んー……なんなかなあ、それは。

少し沈黙。

聴がやつてくる。

聴 なあなあなあな、トイレにこんなでつかい蛾いたんだよ。こ
んなんだよこんなん。見たことあるこんなん。(手のサイズをかえ
ながら) 普通こんなんじやん？ こんなんだからね。

達也 あー俺行つたときも飛んでました。

聴 だつてこんな見たことある？ こんなんだよ？

達也 あれヤバイっすよね、あれ絶対将来モスラになるやつです

よ。

聰 あの数？あの数モスラになるの？滅ぶよ日本。

祐介 ねえ、あれ水瓶座なんだけどさ、あれ水瓶に見える？

聰 え？ああ、……まあ言われてみれば亀みたいに見えるね。

達也 いやお兄さん、亀じやなくて瓶です。

聰 瓶？ああ、瓶ね、はいはい。うん、見えないこともないね。

祐介 ま、あれ水瓶座じやないんだけどね。

聰 えウソ。だつて瓶っぽいじやん。

祐介 全然瓶っぽくないだろ。

聰 なんだよ。あ、またトイレ行くわ。

祐介 なんだだよ。

聰 さつき小便で今度は大便だよ。しかも俺頻尿だし。

祐介 はい、いつてらっしやい。

聰 いつてきまーす。

聰は去る。

ふみか ……ねえ、大丈夫かな。

達也 ん？ああ。

と言つて、二人は祐介を見る。

祐介 だつて、仕方ないじやん、ちょっと言つちやつたら、すげえ

行きたいって言うんだもん。バーベキュー セット全部持つて来るよとか言つて。

ふみか いやまあ、いいけど、ねえ。朝実が、

達也 車に乗つてるときさ、あれ絶対寝たふりしてたよね。

祐介 で俺の兄貴はひたすら喋つてるしね。

達也 でも、朝実ちゃん、それでも行くつて言つてくれたんだろ。

ふみか うん、来てくれないかと思つてたけど、……でも、なんか

達也 今日、ずっとどつかきつそうな感じしてたけど。

聰 朝実ちゃん遅くね？食器洗うのこんな時間かかる？

ふみか たぶん流しであたしのお母さんのトーケに捕まつてるわ。

基本止まんないから。

祐介 ちょっと様子見に行くかな。

達也 らっしやい。

祐介 なに？

達也 行つてらっしやいの「らっしやい」だよ。

祐介 あ、はい。

ふみか 行つてら。

祐介 うん。

祐介は去る。

達也 「ミイラ取りがミイラになる」つて知つてる？

ふみか うん。

達也 その可能性あるね。

ふみか お母さんのトーケ強力だからなあ。

達也 ……よし、トランプでもしよつか。

ふみか 二人で？

達也 三人で。お兄さんと。

ふみか 大便だよ。

達也 そんな一時間も大便してないだろ。

ふみか なにすんの。

達也 インディアンボーカー。

ふみか えなにそれ。

達也 トランプでイノシシ狩るゲームだよ。

ふみか なにそれ、誰かイノシシ役やるの？

達也 嘘だよ。

ふみか 嘘かーい。

と言いながら去つていく。

川。みんなとは少し離れたところ。

朝実が座っている。

祐介がやつてくる。

祐介 ……どこにいるのかと思つた。

朝実 ……。

祐介 流しにもいなかつたから。

朝実 うん……。

少し沈黙。

朝実 ……あっちの方、木生えてるじゃないですか。ずっと。あそこに入ると、一度と出てこられないらしいんですよ。だから、あ

あそこには絶対入っちゃダメだって、この前キャンプに来たとき、お母さんが言つてたんです。祐介 あ、じゃあ、危ないですね、入つたら。

少し沈黙。

祐介 ……あ、もしかして、ここですか？

朝実 ……。

祐介 全然、浅そうに見えますけどね。

朝実 急に地面なくなつて、そのまま流されて、……家族と一緒に来てて、ちよつと散歩しようと思つて、一人でここまで来て、

祐介 今日、よく来られましたね、あ、そういう意味じやなくて。

朝実 友達の家に泊まるつて言つてきたんで、

祐介 あ、じゃあ、嘘つきすね。僕も、よく嘘つくんですよ。勉強してくるつて言つて図書館行くんですけど、そこでただぼーっとしてたり。

朝実 あのまま流されて、死んじやつたほうがよかつたですかね、私。

祐介 ……。

朝実、靴と靴下を脱ぐ。
川に一步踏み入れる。

朝実 あのとき、こういう感じで、冷たくて気持ちいいなあつて思つてて、あのときは、もつと明るかつたですけど。

朝実がもう少し歩いて行こうとすると、祐介が朝実の手をつかむ。

祐介 ……戻つてください。

祐介 朝実に促されて川から戻つてくる。

祐介 ……靴、履いてください。

朝実、靴下を履こうとするが、足が濡れているのでためらう。

祐介、首からぶら下げるタオルで朝実の足を拭く。

朝実 ありがとうございます……。

朝実、靴下を履き、靴も履く。

祐介 あの、死ぬこと考えるなんて、変です。だつて生きてるのに。
朝実 私も、自分のこと変だと思つてるんです。もつと、楽しいこととか、織田くんのこととか考えて、織田くんは私のことどう思つてるんだろうとか、そういうこと考えて、勝手にドキドキしたりして、……でも、それってダメことじやないですか。

祐介 なんでダメなんですか。僕だつて、藤山さんのこと考えたり、藤山さんは僕のことどう思つてるんだろうとか考えて、勝手にドキドキしたり、しますよ。それってダメなんですか。

朝実 織田くんはいいけど、私はダメです。

祐介 そんなの、誰だからよくて、誰だからダメとか、そんなのないです。

朝実、川の向こう側を見ている。

祐介 ……なにもないところに行きたいですね。

祐介 なんすかそれ。

朝実 誰も私たちのこと知らない世界です。

祐介 ああ……いつすね、それ。

少し沈黙。

祐介 え、それあの世に行きたいとかそういうことですか。

朝実 あ、そうじやなくて。どつか、遠くに。

少し沈黙。

祐介 ……少し前に、なんのドラマか忘れたんですけど、40くらいのステッキた主演の俳優が、高校生たちが遊んでるのを見て言つてたんですよ。あいつらは自由でいいなつて。……でも、それって間違つてますよね。お金もないし、一人じやどこにもいけないし、それに、心だつて強くないし、僕、こう見えて、けつこうガラスのハートですから。藤山さんだつてそうでしょ。だから……同じなんです、僕も、藤山さんも。

少し沈黙。

祐介 行つてみませんか。あそこ。

朝実 祐介 たぶん、誰もいないし、誰も来ませんよ。僕たち以外。
朝実 祐介
朝実 祐介 競争しませんか。疲れるまで走って、先に疲れた方が負け。
朝実 祐介 負けたらどうなるんですか。
朝実 祐介 勝つた方の言うこときくつて、これにしましようよ。
朝実 祐介いいですよ。
朝実 祐介 じゃあ、位置について……よーい、ドン。

※無料版はここまでです。ご覧くださいありがとうございます。
た。全編はクラーク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購
入できます。ありがとうございました。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

2015年から「ゆりいか演劇塾」というワークショップをやつていて、その中の昔から参加してくれている人たちと作品をつくることにした。メンバーにどんな作品をやりたいか書いてみたところ、いろいろと意見が出たが、そのうちの一人が「制服を着たい」と言つたのと、「今まで見たことがないので、小佐部さんの純愛ものが見たい」という意見もあつたことあつたので、「高校生の純愛もの」というコンセプトが決まつた。僕自身は高校時代、大した青春を体験したわけでもないし、純愛もなかつたので、書くのに苦労するかと思つたが、どうでもいい不毛の会話をたくさん書こうと決めたことで、思つたよりも書く作業は楽しく進んだ。

よくある純愛ラブストーリーになるのは避けたいと思つて書いたが、実際どのようなものになつたかは、観た人、読んだ人の判断に任せようと思う。両想いの二人がなかなか結ばれない、というのはよくあるパターンだとは思うが、そこに恋愛に関するトラウマではなく、人生を楽しむことに対する「罪」の意識を置くことにした。罪＝過去は消えるものではない。僕の台本にしてはめずらしく善人ばかりの作品だが、被害者も加害者も（被害者・加害者という書き方は正しくないかもしれないが）あるひとつ過去に対するように向き合えばいいのかわからず、そこがドラマの中心になるように書いた。人間誰しも「過去のアレがなかつたことになればなあ」と思うことのひとつやふたつはあると思うが、その過去にうまく付き合つていける人もいれば、どうやつて付き合つていけばいいのかずつとわからないままの人もいる。この作品をみて、なにかヒントになる人もいるだろうし、なんの役にも立たない人も

たくさんいるだろう。結局それは自分で考えなければいけないものだ。

子供というには大人だし、大人というには子供という高校時代、自分のことを振り返つてみると、今よりもだいぶ世界は狭かつたし、自分なりの価値観や個性というものもありはあるとは思えなかつた。それでもそれなりに生きていたなあとと思う。お金もないし、ひとりでは遠くに行くこともできないし、家と学校だけが世界だと思つてしまつて、それが高校時代というものだなと思つた。（実際は高校生だつていろんなことを自力でできるのだが、そのことに気づかなかつたり、周りの環境がそうさせないことも多い）。僕は、「高校時代に戻りたいですか」ときかれればまずノーと答える。それはやつぱり今のほうが世界も広いし楽しいから。というか高校時代に楽しい思い出もそんなにない。なのでこの作品は、こんな高校時代を過ごせたら楽しかつただろうな、という僕の想像ともいえる。祐介とふみかと達也が、祐介の家でただただ不毛な会話を繰り広げているシーン。ああいうところに僕の憧れがあるのかもしれない。あそこは書くのが楽しかつた。きっとあの3人は高校を卒業しても、なにかの折に3人で会つたりして、不毛な会話を繰り広げ、ケラケラ笑つてゐるんだと思う。

さて、ここで告白しますが、僕のお気に入りはふみふみです。親友と好きな人がかぶつたときに「あいつ彼女いるよ。」とかさらつと言つちやうあたり人間を感じます。あの不毛なことばかり言つて人生楽しんでそうな彼女が告白してさらつと振られちやうのか、かわいそうだけど愛おしいです。頑張れふみふみ。きっと将来いいことあるよ。

劇団ゆりいか第1回公演『硝子の猫』

【キャスト】

織田 祐介 ━━ 高橋寿樹

藤山 朝実 ━━ 橋場美咲

橋本 ふみか ━━ 後藤夏実

五十嵐 達也 ━━ 若月篤

織田 聰 ━━ 中村雷太

【スタッフ】

作・演出・音響・宣伝美術 こさべあきひる

舞台監督 米沢春花 (NPO法人コンカリーニョ)

照明 森岡沙綺

衣装 後藤夏実

小道具 若月篤 中村雷太

受付 牧野あすか 石塚可那子 松浦ひかり 中村のか 濱田さつき

制作 野澤麻未

【日程】

2017年9月30日 (土) 11時半／18時

【会場】

ターミナルプラザ」とんPATO'S

【料金】

一般1500円 高校生以下500円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。了承ください。

『硝子の猫』の上演について』

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合は、上演許可料は無料です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を上演許可料とします。脚色や潤色は自由におこなってかまいませんが、大きく変更する場合は「脚色・○○○○」など脚色者をチラシ等に表記してください。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画運営委員会まで。

※中高生や学生が主体の団体（部活動や演劇サークルなど）が上演する場合、上演許可の連絡をしなくてもかまいません。高校演劇の大会などでも、「自由にお使いください。可能な範囲でチラシやパンフレットなどに「作・」こさべあきひる」など作者名の表記をお願いします。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com

2017年9月27日 第1刷制作

小佐部 明広 (こさべ あきひろ)

1990年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。2011年に「劇団アトリエ」を結成し、2017年に「クラアクト芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。2017年から平仮名名義「こべあきひろ」としての執筆活動も開始。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール2015優秀賞。

クラアクト芸術堂ホームページ

<http://www.clark-artcompany.com>